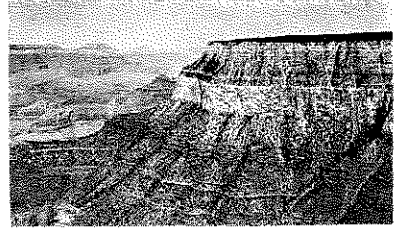


アメリカの国際コンクール

(第3回ブリガムヤング国際コンクール)

審査員を務めて

福田 靖子



帰り途中立寄ったグランドキャニオン

★審査員として招かれるにあたり



主催者側の一人ポール・ボレイ博士と筆者

全日本ピアノ指導者協会主催のピティナ ヤングピアニストオーディションと提携しておりますアメリカ・ブリガムヤング国際コンクールの第3回目が、この6月末より7月にかけて開催されました。

これは、1週間に亘って開催される、ブリガムヤングピアノフェスティバルの中の一部であり、中心となるものです。

今は故人となったアメリカで特に人気のあった女流ピアニスト、

ジーナ・バックラーを記念して生まれたコンクールであり、そのコンクール名は、ジーナ・バックラー インターナショナル コンピティションと呼んでいます。

このピアノフェスティバル、及びコンクールの主催者の1人である、ポール・ボレイ氏は、私どもの協会と姉妹関係にある、102年の歴史を持つ、M・T・N・A(音楽教師会とも訳しましょうか)の、ユタ州の副会長も務められている方です。こういう関係から、昨年ボレイ氏が日本に来られ、全国各地でリサイタル、レクチャーをしていただくと共に、私どものコンクールのことで、田村宏先生とも歓談されたのでした。

その折に、日本からも審査員を、というお話があり、



今まさに表彰式が始まらんとしているところ。左は審査員席。右側は最終10人に残った参加者たち。真中に、カワイより贈られたグランドピアノ。マイクの前に立つのは、主催側のポール・ボレイ博士。

いろいろな方と会って帰国されました。アメリカより、私に審査員として招きたいというお手紙を頂きました時、私は適任ではないと、郑重におことわり致したのでした。

なぜなら、アメリカにも国際コンクールと名のつくものは幾つかあり、4、5年前には、井口基成先生が、パンクライバーンコンクールに審査員として招かれておりますし、安川加寿子先生は、昨年クリヴランド国際コンクールに審査員として渡米していらっしゃいます。

また、アメリカでは、全米各地で大きなピアノフェスティバルが開催され、盛況を極めており、その幾つかに私は招かれ、参加しておりますし、ワシントンでの国際コンクールにも、一ゲストとして招かれた事があり、多少の様子を知っている者として、私などは審査員となる器でないことを自覚していたからです。

しかし、再三のおすすめをいただき、これも人生の1つの体験と思い、審査員の末席を汚したわけです。またコンクールの是非とか格は別として、審査員の顔ぶれ、それに課題曲などで、コンクールの評価がある程度できると日頃思っておりましたから、自分の耳を確かめたいという気持ちもありました。

★コンクール課題曲

さて、このコンクールの今年の課題曲は、バロック、クラシック、ロマン、現代の4期から、自分で選んだ40~50分のプログラムとコンソルトを提出し、第1次のテープ審査には、バッハの平均率1、2巻の中より、プレリュードとフーガ1曲、ショパンのノクターンの中より1曲、それにハイドン、モーツァルト、ベートーベン、シューベルトのピアノソナタの中より1曲1楽章をテープに吹き込んだものを、5月15日より1ヶ月の間に送り、第2次予選への資格を得るわけです。

年令は16才以上、30才迄。これだけの曲をこなすには、相当のキャリアが必要でしょう。今回のテープ審査に応募したのは73名、この中より、32名が、6月24日(土)の第2次予選に出演しました。その中に日本人は皆無でした。ニューヨークに住む日本の学生さんも応募されたようですが、残念ながらこの中には残らなかったということでした。

★審査員の顔ぶれ

審査員は全部で12名。ジュリアードのアデル・マーカス女史、第1回チャイコフスキーコンクール入賞者のダニエル・ボラーク氏、季刊誌ピアノクォータリの編集長のロバート・シルベルマン氏、岩崎淑氏のお友だちでもあり、この秋パールマンと来日する、サミュエル・サンダース氏、など、アメリカ、フランス、ブラジル、アルゼンチン、私の日本、と国際色豊かなものでした。ただ、フィリップ・コーラント氏が、突然来られなくなったことは残念なことでした。例年、審査員は1部を除いて交代、顔ぶれを変えているようでした。

★第2次予選

6月24日(土)の第2次予選の時に話を戻しましょう。まず、このブリガムヤングピアノフェスティバルの主催者、前述のポール・ボレイ氏から、審査方法が説明されました。

1人15分のプログラムを審査すること、12名の審査員によって、10点満点5点きざみに採点されたものを、最高点と最低点はカットし、平均を出し得点とするということなどです。

採点に当っては、審査員同志は口をきいてはいけない、離れていなければいけない、採点表には、署名し、テクニック、音楽性、選曲などについて、コメントを書くようになど、諸注意がございました。この採点表は、出場者各自に渡されます。



アルゼンチン生れのピアニスト、エドワード・デルガド氏の公開講座。ピアノを弾きながらの講演。

朝8時から始まった審査が終わったのは夕方6時半、さすがに疲れました。評点が出るまでの1時間、参加者、審査員一同、中庭に集まり、カナッペによる立食パーティーがありました。



最終審査の打合せをする審査員、左から、アデル・マーカス、福田靖子、故ジョーナ・バックハウアーの夫君、マーク・ウェスコット、マルケス・ガード(女)エドガード・デルガド、一人おいて、サミュエル・サンダース氏、その他の諸氏

いよいよセミファイナルに出場できる10名の発表があり、あちこちで、歓声と拍手が起きました。私がよい点を入れた上位11名の中から10名、はいっておりました。審査中、東洋人(中国人か韓国人か)が演奏しますと、ついがんばれ、という気持ちになってしまう自分を省みて、2名の東洋人が残ったことは大変うれしいことでした。

それから、6月26日(火)と27日(水)2日間に亘って、10名の審査がおこなわれ、最後の3名を選ぶのです。ちょっとしたリサイタル分の演奏を10人分聞くのですから、まったく大変です。審査方法は、前と同じ。私は、前日に聞いた採点を忘れてはと、自分のメモに書き写しておきました。さすが10名の演奏はつぶ寄りで、国際コンクールは、ちょっとやそつとで立ちうちできないと感じさせるものがありました。また、テープ審査、第2次予選以外のプログラムにはいるのですから、レパートリー曲数も大変なわけです。

2日間の審査が終わり、私の採点上位3名と一致した方々が決勝進出者として発表されました。

★審査最終日

さて、審査最終日、7月1日(土)は、ユタシンフォニーオーケストラとのコンツェルトです。さすがに会場も満席、お客様方も審査に参加ということで、プログラムについての投票用紙に、1名だけ印をつけて出してください。

審査員は、今度は無署名で、1位と2位の名前を書いて出せばよいのです。審査員室は、予選の時もそうでしたが、審



わがメンバーの為に、即時通話のヘッドフォンが用意された。



第1回チャイコフスキーコンクール入賞者、ダニエル・ボラック氏のピアノリサイタルの後に。聴衆からため息がでるほどの名演であった。

査員以外の人は誰も部屋に入れません。主催者のポール氏も部屋には、はいてこられません。

ここで、ちょっとトラブルがありました。審査員の1人が、審査規準といったものがあつたら見せて欲しいと言いだしたのです。というも、1位は、誰の頭にも定まったものがあつたに違いないのですが、2位を記入するのに、どうしても決めかねられたのだと思います。勿論、私もどちらを2位にしようかと大変迷いました。「2位を2人書いてはいけないか」とか、「1位だけを書いて出してはいけないか」と言い出したのです。このコンクールの第1回目からの審査員であつた方が、これはいけないということ、1位、2位の氏名を書くことになりました。

どの審査員も、書くところをかくしています。私は、かくすようになかっこうをして、見られてもよいようにして投票しました。

★審査発表

開票が終わって、第1位、ベートーベンのコンツェルト3番を弾いたアーサー・グリーン、第2位は、リストのコンツェルト1番を弾いたエドワード・ニューマン、と決まりました。3位は残るスティーブン・メイヤー氏となるわけで、彼は、ラフマニーフのコンツェルト3番を弾いたのでした。

またしても、私が、1位、2位と書いた2人が、そのまま1位2位となつたのです。この時になって、やっと審査員として、恥をかかずにすんだと安堵したのでした。

聴衆が投票した得点は、審査員の1人分となります。審査員の得点が終わって、おびたしい聴衆の投票カウントに入りました。私も手伝い、正という字を書きましたら、めずらしがって見つめる審査員の方もいました。

この聴衆の投票点は、リスト1番コンツェルトを弾い

たエドワード・ニューマンを1位とする者が圧倒的に多くありました。

そこで私は、聴衆というのは、ピアノの演奏の良し悪しというのは安外聴き分けられないもので、曲の華麗さにまどわされるものだということを感じた次第です。

次に、審査員賞として、現代曲の優れた演奏をした者を、32名の中より選びました。この時は、12名の審査員がそれぞれ意見を出し合つて、4名の候補が上がり、あとは挙手で決めました。

これには、ベティー・ポーというシェーンベルグ作曲ピアノ曲作品11の1番を弾いた、中国系アメリカ人の女性が選ばれました。この人の採点表に、私は、「東洋人として、大変共感が得られ、すばらしい演奏であつた。今後を期待する」と書きましたので、採点者として大変うれしいことでした。審査員が解散する時、「ここでの模様は1週間は口外せぬように」と言われました。

★表彰式

いよいよ、表彰式です。舞台の上に、セミファイナルに残つた10名、そして12名の審査員、主催者側のおえらい方々、亡くなったジーナ・バック女史の御主人、これまた、私の親友で亡くなったヨルダ・ノヴィック女史の御主人など、総勢舞台の上になりました。

また、1位授賞者に贈られるカワイのコンサートピアノが、生花に囲まれて舞台の中央に飾られています。

1通りのセレモニーが進んで、最後表彰者への授賞です。最初審査員賞を受けたポーに、あちこちから歓声と拍手。最後の1位、アーサー・グリーンが授賞されるまでの間、会場は興奮のつぼでした。

ちなみに受賞の内容を記しましょう。

1位、ジーナ・バック賞として、1万3千9百ドルの賞金と、先に書きましたカワイのモデルBグランド、そして、今年から来年にかけて、ユタ州を始めとするアメリカ国内での演奏旅行、コンツェルト協演。そして海外演奏旅行。



左よりプリガム大学音楽部長、2位のE・ニューマン、1位のA・グリーン、賞品のカワイピアノ、筆者、3位S・メイヤー、P・ボレイ氏。

2位, ヨルダ・ノヴィック賞として, 2千ドルと, ユタ州内での演奏会, コンツェルト協演。

3位, 故ヨゼフ・クライス賞として, 千ドル, そして, ユタ州内での演奏会, コンツェルト協演。

審査員賞は, 20世紀現代作品演奏優秀者として, 百ドル。セミファイナルに残った10名全員に, 百ドルといったところでした。

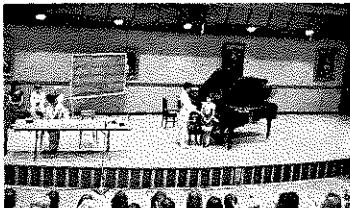
日本からも, この賞のいずれかを受け取る人がいることを信じて疑わないものです。

★ピアノフェスティバルに参加して思うこと



左から山岡みゆき, 海谷泉, 毛藤美代, 星野美貴子, オーマン女史, 筆者, 斎藤弘子, 金子勝子, 野崎純子, 河本小代子, 笹谷裕子, コンクール, ピアノフェスティバルに参加されたメンバー達。

最後に, このブリガムヤングピアノフェスティバル, そしてコンクール参観の為に, 日本から14名の方が参加したことを御報告しましょう。また, ピアノフェスティ



バルには, 私が御紹介した, 鈴木公江先生, 鈴木要次氏 (氏は実際には行かれなかった) が, 講師として招かれました。鈴木公江先生は, 日本で即興演奏の指導をうしろ左は鈴木裕子さん, 机の前は日本から同道の通訳野中潤子さん

者として, 優れた実践を持つ方で, その「山びこごっこ」と言っておられる指導法を, アメリカのお子さんを使つての即興演奏を御披露されました。最後に演奏したお子さんの鈴木裕子さんとポール・ポレイ氏の生徒さんマック・ウィルベルグさんとの即興共演は圧巻でした。



即時通訳をして下さっている学生のダン・ウィリスさん。見事な通訳であった。

また, ジュリアード音楽大学教授アデル・マーカス女史のマスタークラスに, 日本から参加した山岡みゆきさんが, リストのバガニーニの主題による変奏曲, ブックIIを演奏し, 絶賛を博しました。



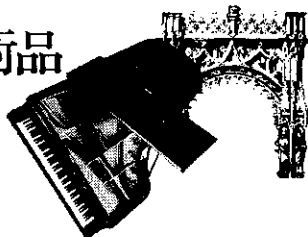
アデル・マーカス女史のマスタークラスを受ける学生会員の山岡みゆきさん。通訳はジュリアードで学んだ秋元杉江先生。

アメリカでのピアノフェスティバルは, どこでもそうですが, 朝8時半から, 夜のコンサート終了の夜11時頃迄, 毎日毎日, ぎっしりのプログラムがあります。日本人は, よく働きすぎると言われますが, こんなプログラムで, 研修会を開催したら, 主催者側のスタッフも, 参加者の方々からも, 文句がでるに違いありません。

アメリカのピアノ教師たちに, 「勉強しすぎる」と言うことばを, 働きすぎると言われる日本人から進呈したいと思います。

格調高い音の芸術品
ディアパソン

DIAPASON



浜楽商事株式会社

本社 浜松市寺島町200番地 丁430

仙台営業所 ☎ <022> 23-3181

東京営業所 ☎ <03> 379-1371

浜松営業所 ☎ <0534> 54-2131

名古屋営業所 ☎ <052> 962-2966

大阪営業所 ☎ <06> 271-7846

福岡営業所 ☎ <092> 531-4031